

研究発表要旨

『一九八四年』の変奏としての『存在の耐えられない軽さ』—家族のあり方に着目して
篠原 学

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』について、ミラン・クンデラはその政治的側面を強調し、文学的価値については否定的だった。このことは、クンデラ研究の内部でも批判的検証に付されることがあり、『存在の耐えられない軽さ』と『一九八四年』の類似を根拠に、クンデラの主張を不当なものとする見方が提出されている。本発表はこれを踏まえて、両者の類似のなかにある差異に意味を与えようとする試みである。

この差異を孕んだ類似は、それぞれの作品に描かれた家族のあり方においてとくに鮮明に浮かび上がってくるように思われる。いずれの作品でも、家族のあり方は政治的な事象と表裏一体になっているのだが、そこには微妙な違いもある。その違いに焦点をあてて、クンデラの小説がある意味で反転された『一九八四年』であると示すことが、ひとつの目標となる。同時に、そうした読みを可能性として提示することで、オーウェルに対して不当に厳しかったクンデラの文学観を、その不当さ自体を切り口に再検討してみたい。

作家アラン・シリトーとイスラエルの最初の王サウル：自伝 *Life without Armour* を読む

伊藤由起子

アラン・シリトー (Sillitoe, Alan. 1928-2010) は、第二次大戦後のイギリスの代表的な作家である。1958年に出版された最初の作品『土曜の夜と日曜の朝』と次の短編集『長距離走者の孤独』は出版されるや否や大ヒットした。初期の作品に描かれているのは、自分が知るイギリスの工業地帯の労働者階級の姿であり、自伝的な作品が多く、作家自身も「書き尽くしてしまった」と告白している。労働者階級を書かなくなった10年後、自伝 *Life without Armour* (1995) が出版されたが、イギリスの代表的日刊紙 *The Times* の書評は散々なものであった。本発表では、自伝的作品を書き続けた作家が改めて自伝に挑んだ理由を、自伝の冒頭のエピグラフの一節、旧約聖書の「サムエル記上」31章から読み解き、シリトーとイスラエルの最初の王サウルとの比較をしつつ、分析していく。